

令和元年度（平成31年度）「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 平成31年4月16日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

(1)教科に関する調査

○調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～6学年> 国語、社会、算数、理科

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立宮前小学校

[国語]

(1) 各教科の定着状況についての概要

2・3年生は、品川区の平均正答率と同程度の結果となっているが、5・6年生は、やや下回っている。4年生は、1つの観点を除いて区の平均正答率を上回っており、学習したことが十分に身に付いていることが伺える。昨年度、漢字学習に注力し取り組んできており、3・4年生では成果として表れているが、5・6年生では、成果として表れていない結果となっている。また、全体的な傾向として、文章の読み取りの問題に、苦手な傾向が表れている。3年生では書くことに関して、学習したことが十分に身に付いていない結果が表れている。

(2) 具体的な課題

学年	課題となった内容
2	ものがたりをよみとる てがみへのへんじをかく
3	作文 物語の内容を読み取る
4	話し合いの内容を聞き取る
5	漢字を書く 言葉の学習
6	漢字を書く 言葉の学習 説明文の内容を読み取る

(3) 課題の原因として考えられること

全体として、文章を読み取ること、そこから書き表すことの問題が区の平均正答率と差があり、定着していないことが伺える。2年生での「物語の読み取り」、6年生での「説明文の内容の読み取り」などで顕著だが、「読み取り」を苦手としている児童が多い。原因として、このような形式の問題を解く機会が少ないのではないか、ということが考えられる。授業でも取り組んでいるが、こういった経験を今後さらに積んでいく必要がある。

「漢字を書く」ことを苦手としている学年もある。これは、漢字に触れる機会が少ない、漢字の書き取りの量が少ないことが原因と考えられる。

(4) 課題解決のための方策

○読書指導や、文章読解での授業の充実により、児童の読解力の向上を図る。

- ・図書館を利用して学習する時間を、週1時間確保する。
- ・物語文、説明文の読み取りでは、短時間の練習を行っていく。長い文章ではなく短い文章、さらに前学年の内容から、朝学習の時間などを用いて取り組ませていく。

○計画的な漢字学習により、漢字学習の意欲の向上と、定着を図る。

- ・朝学習を活用し、新出漢字を学習していく。
- ・毎日漢字の反復練習を行い、確実な定着を図る。2年生以上では、新出漢字学習後は確認の小テストを行い、繰り返し練習をさせ定着を図っていく。
- ・毎日の家庭学習でも計画的に取り組ませ、保護者にも協力を呼びかけていく。
- ・漢字検定を実施する。

○辞書の活用、既習事項の計画的復習により、言葉の力の向上を図る。

- ・各学級に辞書を備え、言葉の意味が分からない時には、教科を問わず、いつでも活用できる教室環境を整えていく。
- ・言語事項の指導の際や文章読解の際に、既習事項を確認する時間を設け、計画的に復習していく。

○相手や目的に応じた文章を書く力や、段落構成を考えた文章を書く力の向上を図る。

- ・作文の学習では作文メモを活用し、文章の構成を考える指導を充実させる。
- ・低学年から視写を計画的に行い、正しく文章を書きながら姿勢を身に付けさせる。

(5) 次年度の数値目標

全学年、全領域で、目標値を上回る。

【社会】

(1) 定着状況についての概要

モジュールや授業の展開の工夫、宿題やタブレット学習等の活用をすることで基礎的な内容を意識して取り組み、社会的事象についての知識・理解が定着していることがわかる。また、資料から必要な情報を読み取るために、読み取りを丁寧に取り組んできたことで、少しずつ資料を読み取れるようになってきた。しかし、全体的に思考・判断・表現の領域は数値が低く、知識や資料から読み取った情報を関連させて考えることが弱いため、身の回りの事象につなげ深い理解ができているとは言い難い。

(2) 具体的な課題

学年	課題となった内容
4	生産や販売
5	生活環境を守る活動
6	国土の自然などの様子

(3) 課題の原因として考えられること

基礎的な内容が少しずつ定着する一方で、全体的に思考・判断・表現においては、まだまだ数値が低い。例えば、4年生のゴミの学習では、資料や調べ学習・社会科見学などから家庭から非常に多くのゴミが排出されていることは理解できている。また、資料の読み取りや社会科見学などから、多くのゴミが様々な工夫によって回収されていることも知識として身に付いている。しかし、自分がゴミを減らした方がいい、そのためにはどのような行動をとるか、ということにはつながらない。表面的な理解で止まっており、生活に直接つながっていないことが考えられる。

(4) 課題解決のための方策

○意欲・関心・態度を高めるために

・単元の導入だけではなく、時事問題や身近な問題を取り上げ、学習内容やテレビのニュースで流れる内容が身近な事象とつながりがあることを意識させていく。

○思考・判断・表現力を高めるために

・学習したことをまとめとして、新聞作りなどを行う際に、学習した知識をきれいにまとめるだけでなく、思考するポイントを明示して、自分の考えを書かせる。そうすることで、自分の考えを書くことに苦手意識のある児童も取り組めるようにする。

○資料の読み取り

・昨年度に引き続き、グラフや資料の読み取り、また地図の使用頻度を増やすことで、技能だけでなく、知識理解の定着を図る。

○基礎的な学習内容を一層定着させるために

・タブレット学習(トータル学習システム)の取組を増やしていく。問題の準備や採点に時間がかかりすぎないタブレット学習に取り組むことで、どの学年も効率的にくり返し問題に触れることができ、今後も基礎的な内容の定着を図ることができる。

(5) 次年度の数値目標

全学年、全領域において目標値を上回る。

[算数]

(1) 定着状況についての概要

計算力を高めるために、具体的操作活動や自力解決の時間を確保してきた結果、計算の問題は、ほとんどの学年で目標値を上回っていた。計算量を増やすなどの取組をしてきたが、四則計算が定着できていない児童もあり、習熟度に応じた手立てが必要である。数についての感覚を高めるため、日常生活との関連を図りながら学習を進めてきた。その結果、「長さ・かさ」などの問題で目標値を上回ることができ、定着してきていると言える。

(2) 具体的な課題

以下、各学年における正答率の低い内容である。

学年	課題となった内容
2	集合数の理解
3	加法の結合法則、式の意味の理解、与えられた条件を読み取り、答えを説明すること
4	棒グラフを正しく読み取ること
5	除法の計算のしかたを工夫し、暗算すること、身近にあるもののおよその面積の理解
6	奇数や最大公約数についての理解、図から面積と人数の割合を求めること

(3) 課題の原因として考えられること

領域別で分析すると、数量や図形についての知識・理解が目標値に達していない学年が多く、学んだことを知識・理解へと定着できていないことが分かる。例えば、奇数や最大公約数が表していることを理解できていないなどである。また、定着するには、問題量を増やす必要があるが、問題を解くのに時間がかかってしまうため、演習に十分な時間を設定できていないことも原因である。

「棒グラフを正しく読み取ること」では、一目盛りがいくつを表しているかが読み取れないため、正答できていない。このことは、1年で学習する2, 4, 6…や、5, 10, 15…など、数の大小、順序、系列が定着していないことが原因である。

(4) 課題の解決のための方策

- 四則計算の確実な定着を目指す。
 - ・計算の意味や計算の仕方を筋道を立てて理解せず計算をすることがあるため、時間が経つと計算方法を忘れてしまう。計算の意味を理解させることで、計算力の向上を目指す。
- 日常生活と関連付けた授業展開を進めて行く。
 - ・数についての感覚を高めるためには、実体験を伴うことで養われると考えられる。「長さ・かさ」の学習では、実際に測量するなど、直接体験を多く取り入れていく。
- 学習内容の系統性を把握し、学年を遡って復習していく。
 - ・系統性を意識した授業展開をすることで、課題となった場合、つまずきの本質を見付け、根本的な課題解決をする。
- 習熟度別学習や少人数授業を実施し、児童の実態に応じた指導の充実を図る。
 - ・今年度も、2～6年生の算数の授業に少人数指導教員、指導助手2名を配置していく。習熟度別学習や少人数授業を展開することで、児童の実態に応じたより細かな指導ができるようにする。また、専科教員や管理職も、支援に入ることによって具体的な指導をしていく。

(5) 次年度の目標

全学年、全領域で、目標値を上回る。

[理科]

(1) 定着状況についての概要

問題解決型学習を意識し授業を展開することで、見通しをもって実験や観察を行うことができた。また、このことで、論理的に思考する力を付けることができた。さらに、実験の予想の場面、実験、考察の場面で交流ができるような場面設定をすることで、友だちとの交流をしながら学習に取り組むことができた。しかし、自分の考えを相手に分かるように、科学的な言葉や概念を用いて説明するための語彙力や表現力は、十分に身に付いているとは言えない。単元のまとめや復習の場面では、タブレット（トータル学習システム）を活用し学んだことの反復練習をすることで、知識の定着につなげることができた。一方で、実験や観察は主体的に取り組む姿勢が見られるようになったが、実験観察の目的を理解し取り組む姿勢には至っていないことが分かった。

(2) 具体的な課題

学年	課題となった内容
4	植物の育ち方、こん虫の育ち方、電気の通り道、じしゃくのせいしつ
5	動物のからだのつくりと運動、月と星
6	天気の変化、魚のたんじょう、流れる水のはたらき、ふりこのきまり、物のとけ方、電流のはたらき、けんび鏡の使い方

- ・「植物の育ち方」「こん虫の育ち方」など、栽培、飼育活動はしているが、視点を明確にして観察できていないことが課題である。
- ・「電気の通り道」「じしゃくのせいしつ」など、実験した結果から分かったことが知識となって定着していないことが課題である。
- ・「月と星」「天気の変化」など、時間軸も併せて思考できていないことが課題である。
- ・「けんび鏡の使い方」など、繰り返し使う時間を設定できないことが課題である。

(3) 課題の原因として考えられること

- ・実験や観察などのねらいが明確でないため、何を学ぶか子どもに理解できておらず、実験や観察をやることだけに留まっていること。
- ・直接、目で見れなかったり、触れることができない学習内容の場合は、実感を伴う学習となっていないため定着できていないこと。
- ・実験結果から考察を行い、自分の考えを科学的な用語を用いて表現する力が不十分であること。
- ・実験の技術が未熟なため、実験に多くの時間を要してしまい、考察、まとめの時間が十分に確保できていないこと。

(4) 課題解決のための方策

- ・実験や観察などの課題を子どもの「なぜ」「どうして」の問いを足掛かりとして設定することで、実験や観察などに必然性をもたせることが大切である。子どもが、問いをもてるような事象提示などの授業の改善をしていく。
- ・直接体験ができない学習内容は、映像資料や模擬実験を通して、直接体験に近付けることが大切であるため、適切な資料提示が不可欠である。また、それらの現象をモデル図やイメージ図を用いて表現する力を身に付けていくことが必要であり、日頃の授業の中でそれらに取り組みせていく。
- ・自分の考えを用いて表現するためには、科学的な言葉の意味や概念を理解し、使えるようにすることが大切である。科学的な言葉の定着を図るためには、それらを使った対話や説明活動などの時間を十分に確保していく。
- ・実験の技術を向上させるためには、実験器具などを繰り返し使うことで正しい使い方を身に付けることが大切である。そのためには、実験器具の使い方の事前指導を具体的に行うことや実験器具の使い方や安全に使用するための約束などを掲示し、視覚化していくことで子どもの意識を高める。顕微鏡などは、教室など身近に置いておくことで、いつでも使えるようにしておく。
- ・「ふりこのきまり」「電流のはたらき」など、データを基に結果を分析、整理していく必要があるが、理科で習得した力だけではなく、他教科で習得した力も活用しながら解決していけるように他教科との関連を図り、横断的に学習が進められるよう指導計画を立てていく。

(5) 次年度の目標

- ・全学年、全領域で、目標値を上回る。